説　　教　　イザヤ書 56 章 7 節　　マルコ福音書 11 章 12～23 節

「主が求めたもう果実」

２０１４・０７・２７（説教１４３０１５４７）

福音書には主イエスがなさった数々の奇跡が記されていますが、それらはみな病気の癒し、嵐の鎮め、パンの奇跡、死人の甦りなど、神の祝福と主の愛の確かさを感じさせるものばかりです。しかし今朝のマルコ伝 11 章 12 節以下の御言葉はそうではありません。それは、主イエスが「いちじくの木」を呪われたところ、その木が翌日に枯れてしまったという出来事だからです。私たちはこの御言葉をどう解釈して良いのか困るのではないでしょうか。「よくわからない」というのが本音ではないかと思うのです。

まず 12 節から 14 節を読んでみましょう。主イエスは十字架に至る最後の一週間をエルサレムで過ごされましたが、夜は少し離れたベタニヤという村に泊っておられました。ですから 12 節に「彼らがベタニヤから出かけてきたとき」とあるのは、主イエスと弟子たちがいつものように「ベタニヤからエルサレムに向かう途中で」という意味です。その距離はおよそ 3 キロでした。その道の途中に一本の「いちじくの木」があったのです。そこでちょうど空腹を覚えたもうた主イエスは、その「いちじくの木」に実を求めて近づかれた。ところがそのいちじくには葉ばかり繁っていて実はひとつも見当たらなかった。だから 13 節には「葉のほかは何も見当たらなかった。いちじくの季節ではなかったからである」と記されています。すると主イエスはそのいちじくの木に向かって「今から後いつまでも、おまえの実を食べる者がないように」と言われた。いわば主はその「いちじくの木」を呪いたもうたのです。「弟子たちはこれを聞いていた」と 14 節には記されています。

それは主の弟子たちにとっても、主イエスのこの時の御言葉（行動）は理不尽に思えたからです。私たちにも簡単にわかることです。実のなる季節でない時にいくらいちじくの実を求めてもそれは無理難題というものでしょう。その“無理難題”を主イエスは求めたもうた。しかも実のないいちじくの木を呪いたもうた。この主のお姿に弟子たちは困惑したのです。困惑したのは弟子たちだけではありません。古今東西、聖書の様々な注解書の中で、この無理難題が実は不自然でないことを示そうとして様々な解釈が試みられました。その中のひとつに、主イエスは「しいな」と呼ばれる“季節はずれの実”を求められたのだという解釈があります。しかし今朝の御言葉を素直に読むなら、その解釈は当てはまらないと思います。むしろ、ここでマルコが問題にしているのは、あくまでも「主イエスが求めたもうたその時に、いちじくの実が無かった」という単純な事実にあるからです。それが私たちの目に無理難題に見えるか否かは今朝の御言葉の中心ではないのです。

むしろ私たちがここで心にとめたいことは、この「いちじくの木」が当時のエルサレム神殿の象徴であったという事実です。預言者エレミヤの言葉のとおり、人々は「主の神殿、主の神殿」と口先で唱えるだけで、まことの神を信じ敬う心を失っていました。

エレミヤは語ります。実際にはあなたがた（エルサレムの民）は、盗み、殺し、偽って誓い、バアルに香を焚いている。それなのにこの神殿に来て、自分たちは「救われた」と言っている（エレミヤ 7:4～11）。だとすれば、これほど大きな神聖冒涜はないのです。葉ばかり繁って実の無いいちじくの木は、まさにこの民の不信仰（私たちの不信仰）を現わしているのです。それならば、ここでこそ改めて私たちは、主イエスが「空腹をおぼえられた」と明記されていることに心をとめねばなりません。この「空腹をおぼえられた」とは、激しい飢え渇きにも似た切なる思い（神のご意志）をもって、主は私たちを（私たちの救いを）求めておられるかたなのです。だからここで主が求めたもう果実とは私たちの「救い」です。私たちが真の神に立ち帰り「救われた者」になることです。まさに私たちの「救い」という「果実」を主は激しく求めたもう。「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きい喜びが、天にある」（ルカ 15:7）のです。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信ずる者が一人も滅びないで、永遠の生命を得るためである」（ヨハネ 3:16）。そして「神が御子を世に遣わされたのは、世を審くためではなく、御子によって世が救われるためである」（ヨハネ 3:17,18）と記されたとおりです。主が私たちに求めたもう「果実」とは、私たちが主に立ち帰ること。主イエスを救い主（キリスト）と信じ、主の御身体なる教会に連なり、礼拝者として歩むことです。すなわち、主は「信仰」という「果実」を私たちに求めておられるのです。

この御言葉の祝福を受けて、さらに私たちは今朝の 13 節以下の「宮きよめ」の記事へと誘われます。エルサレム神殿の広い境内に、たくさんの屋台（両替商や生贄の鳩を売る商人たちの店）が出ていました。神聖な神礼拝の場である神殿が、いつのまにか人間の利益追求の場となっていたのです。しかも神殿の祭司たちはこれらの商売人たちからリベートを得ていました。だから主イエスがこれらの屋台を追い払われたというのは、私たちの普通の考えからすれば、商売人たちと祭司たちとの癒着構造を改革なさろうとしたのだと考えることができます。しかし、もし本当にそれだけなら、主イエスのこの「宮きよめ」の行為は歴史のひとコマに過ぎないでしょう。屋台の商人たちは一時は逃げても、またすぐ戻って来たに違いないからです。翌日になれば何事もなかったように、いつもの光景が繰り広げられたことでしょう。神殿の境内（異邦人の中庭）ではこうした商売が許可されていたからです。

主イエスの「宮きよめ」のわざは、この世の構造改革と同一のものなどではありません。かつてフランス革命の急進派ロベスピエールは、聖書のこの記事を暴力革命の根拠としましたが、それは見当違いな解釈です。主イエスの「宮きよめ」は旧約聖書のマラキ書 3 章に基づいて、神から遣わされた全世界の救い主（キリスト）がいまここに臨在しておられることを示すものでした。「見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求めるところの主は、たちまちその宮に来られる。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう」。このような「主」（歴史の救い主）がいま私たちのただ中に立ちたもうのです。その恵みの力をもって私たちの罪を贖い、世界を新たになして下さるために、主は私たちのもとに来ておられるので

す。私たちに「信仰」という「果実」を求めておられるのです。主は言われます「『わたしの家は、すべての国民の祈りの家ととなえられるべきである』と書いてあるではないか。それだのにあなたがたは、それを強盗の巣にしてしまった」。この「強盗の巣」とは、強盗の隠れ家という意味です。私たちは罪を犯して、神に立ち帰るどころか、逆にその罪を隠蔽するために、自分の中に隠れ家を持つ存在なのです。神の目の届かぬところがあると思い違いをするのです。

私たちの救いと平安は、いつも主なる神の御前にしかありません。「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう」。まさに御前に立ちえざる私たちを、主はご自身の生命をもって贖い、全ての罪を赦し、御前に健やかに立つ者として下さったのです。ヨハネ伝 2 章 18 節以下を見ますと、なぜこんなことをするのかと問う律法学者らに対して、主は「この神殿を壊してみよ、三日で建て直すであろう」と言われました。それはご自身の十字架による全世界の罪の贖いと、復活による真の生命に基づく新しい礼拝を現わしています。このことからもわかるように、主イエスが「宮きよめ」をなさった意味は、本来は神のものであるにもかかわらず「強盗の隠れ家」になってしまっているエルサレム神殿（すなわち私たち）に対して、主イエスの来臨による真の審き（救い）の時が来たのです。そして三日目に、すなわち主イエスの復活によって、人の手によらない本当の神殿（まことの礼拝）が主によって建てられることを示しているのです。

さて 20 節以下を改めてご覧ください。例の「いちじくの木」は翌日、根元から枯れていました。ペテロも弟子たちも前日の主の言葉を思い出して「先生、ごらんなさい。あなたがのろわれたいちじくが、枯れています」(21 節)と申しました。ここで大切なのはこの「いちじくの木」は「根元から」枯れたという事実です。葉は枯れたけれど幹や根はまだ生きている、ということではなく、木全体が枯れてしまったのです。ここには主イエスの十字架（ご受難）の意味が明らかにされています。エルサレム神殿を根元から完全に終わらせ、全く新しい「救い」を私たちに与えるために、主イエスは十字架の上に完全に死なれた神の子なのです。このことを、使徒パウロはローマ書 3 章 21 節以下にこう申しています「しかし今や、神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者とによってあかしされて、現された。それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない」。

主は今朝のこの出来事を通して「時は満てり、神の国は近づけり、悔改めて福音を信ぜよ」との御言葉を、いま全ての人の救いと祝福として宣言しておられるのです。私たちの罪が（罪と死の支配が）根元から枯れる（滅びる）救いの時がいま来ているからです。キリストを信じキリストに結ばれて生きる私たちは、もはや古き罪の支配を受けることはなく、永遠にキリストの恵みのご支配のもとに生きる者とされているのです。御子イエス・キリストによって神が無償で与えて下さる全く新しい完全な「救い」を、私たち一人びとりがいま受ける者とされているのです。その恵みに共にあずかり、キリストの復活の生命に生かされて、まことの礼拝者として立ち続ける私たちとされているのです。だからこそ、枯れたいちじくの木に関連して 22 節以下には「祈り」について主

の御教えが続きます。この言葉の意味は、祈りによって山でさえ動くのだという魔術的な出来事でもなく、祈れば何でも実現するのだという超自然論でもありません。そうではなく、ここでの「主」は神です。私たちのただ中に、主なる神が、本当に絶対不可能なことを実現して下さった。「罪」に支配されていた私たちが、神に愛され、神の愛に答え、祈りを献げる「神の民」とならせて戴いている。救いの「果実」を結ぶものとされている。それこそ、全てにまさる奇跡の出来事なのです。まさに私たちの上に、主イエス・キリストによって、驚くべき「救い」が起ったのです。死人の甦りが実現したのです。この罪の身体が贖われ、永遠に主のものとされたのです。それこそ山が海に飛びこむよりも、はるかに大いなる出来事なのです。主なる神は、まさにそのような「救い」を私たち一人びとりに現わして下さったのです。私たちをして信仰の「果実」を結ぶ者として下さったのです。